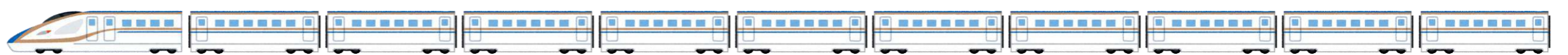


6月25日(金)・26日(土)の2日間、新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで第23回日本言語聴覚学会が開催されました。学会とは演題発表を通し、普段研究していることの成果や、臨床で経験したことを報告する場です。昨秋、東京・旗の台で行われた日本聴覚医学会に出席したので、学会自体への参加は約半年ぶりですが、新幹線に乗っての遠出はコロナ禍になる前、2019年以来です。カスタネット通信7月号では、学会出席報告をしたいと思います。

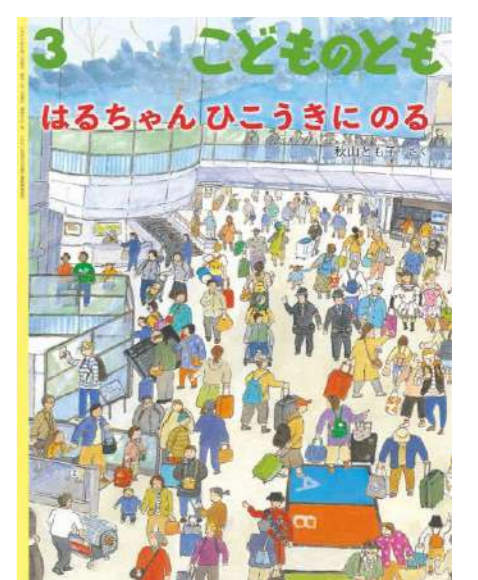
新潟へ



とき315号(ピンボケ)

新潟へは大宮から「とき」で向かいました。私が乗車した「とき」は、2015年3月の北陸新幹線金沢開業に向けて開発された新幹線車両E7系で、2019年3月から上越新幹線でも使われ始めたそうです。車体上部は空色、車体はアイボリーホワイト、車体中央の帯は銅色と空色の日本伝統色の新幹線です。

こどものとも2022年3月号の「はるちゃんひこうきにのる」では、これから楽しい旅に出る人々の空港での高揚感が描かれていました。新幹線に乗るのも在来線とは違った特別感がありワクワクしますね。



車窓から(長岡あたり)

出発日は梅雨の合間の晴天でした。車窓からは青々とした田んぼが広がっているのが見えました。あと2~3カ月すると、黄金色の稲穂に育ち、新潟の美味しいお米になるのですね。この田んぼはコシヒカリなのかなあ、新之助なのかなあ、と思いながら眺めていました。



新潟到着は学会前日でしたので、市内観光をして過ごしました。まずは、ホテルに向かう道中にある萬代橋、日本一の長さを誇る信濃川に架かる橋です。現在の萬代橋は3代目だそうです。

アーチが連なる萬代橋は、花崗岩や御影石で造られているそうです。全長300mの橋を、ジリジリと照り付ける太陽と高い湿度の中歩いて渡ると、とても長く感じました。欄干の高さが低いのと幅が広いので、登ったりして信濃川に落ちる人はいないのだろうか、と心配になりました。



萬代橋(国指定重要文化財)



Befcoばかうけ展望台からの眺め

学会場の朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターの31階に360度景色を見渡せる展望室があったので上ってきました。その名も「ばかうけ展望台」。みなさんも1度はおやつに食べたことがあるのではないのでしょうか。米菓メーカーの栗山米菓が、この展望室の命名権を取得し、「Befcoばかうけ展望室」となったそうです。



栗山米菓HPより

写真の手前が信濃川、奥が日本海です。日本海にぼんやり見える島が、佐渡島です。佐渡島には新潟港から佐渡汽船で渡れます。今回は時間の関係で佐渡島までは行くことができませんでしたが、チャンスがあれば行ってみたいと思いました。

学会



集いの様子

さて、いよいよ学会です。私たちの目的は、「第4回認定言語聴覚士(聴覚障害領域)の集い」の開催です。認定言語聴覚士とは、臨床経験が5年を超え、日本言語聴覚士協会という言語聴覚士の職能団体が用意する「基礎プログラム」と「専門プログラム」を修了し、「認定言語聴覚士講習会」に参加し、試験に合格すると得られる資格です。

2021年12月号のカスタネット通信でもご紹介しています。

私たちはこの講習会(聴覚障害領域)の実行委員を勤めています。その関係で、学会中に認定言語聴覚士以外からも参加者を集め、「集い」を開催しました。この数年間はコロナ禍ということもあり、2021年度の認定言語聴覚士講習会は全課程オンラインで実施されました。また、日本各地で聴覚障害を持つ人々と関わる言語聴覚士と直接会って情報交換する機会もほとんどありませんでした。集いでは「難聴と共に生きる(小児領域)」と「介護予防と補聴器(成人領域)」という2つのテーマを用意し、私たちのクリニックの現状や、日常の臨床で感じていることを話題提供として発表し、その後参加者とディスカッションを行いました。

近年、補聴器や人工内耳の早期装用に伴い、難聴のある子ども達が地域の幼稚園・保育園、小学校に就園、就学するインクルーシブ教育が増えています。小児領域では聞こえる人たちの中で生活する子ども達や保護者、先生達の難聴や補聴器・人工内耳についての理解をどう深めていくか、ということが話し合われました。

さて、相模原市ではこの7月から介護予防促進モデル事業として、身体障害者に該当しない住民税非課税世帯の65歳以上を対象に、2万円を上限に補聴器購入時の助成が開始されます。聞こえにくさのある成人の補聴器装用を促進するためには、このような金銭的助成に加え、自分の聞こえに目を向けることや補聴器装用のメリットについて啓発していくことが重要であるという話が挙がりました。

学会の総演題数は300題弱、そのうち聴覚関連の演題は約10題程度と非常に少なく、聴覚障害領域に関わる言語聴覚士の数が少ないことは明白です。聞こえに目を向けることはどの年代においても大切なことです。そこに対応することができる言語聴覚士を増やすことも必要であると考えます。

